狭山市にゆかりのある文化人――芥川賞作家 津村節子さん

芥川賞作家である津村節子さんは、10代から20代の頃を入間川町（現：狭山市）で過ごしました。90歳を過ぎてもなお、執筆活動を続けられています。

今月は、狭山市にゆかりのある津村さんと著書「星祭りの町」を紹介します。

書斎にて 平成4年
（写真提供:福井県ふるさと文学館）

狭山市とのかかわり

津村さんは、著書「星祭りの町」で「狭山は第二のふるさとです」と述べています。

津村さんは、戦争が激しくなってきた頃に空襲を逃れ、母の実家のある入間川町へ姉妹3人と祖母とで疎開し、終戦を迎えました。戦後、米軍が進駐し、入間川町が基地の町となる姿を間近で見てきたお一人です。

自伝的小説「星祭りの町」は、主人公「育子」の目を通して、当時の入間川町の様子が細かく描かれています。

津村さんにお聞きました

―入間川町で印象に残っていることはありますか？

やっぱり七夕かしらね。

姉と共に洋裁店「ボン」を始めたので、七夕まつりのときに竹飾りを飾りました。当時、七夕の飾りは紙製。紙といっても和紙ね。それでウエディングドレスを作って、人台（今でいうマネキン）に着せて、竹飾りにつるしました。それはそれは話題になったわ。みんな立ち止まって見上げてね。他のところの飾りは折り紙の飾りで、立ち止まっている人は短冊を読んだり眺めたりしていましたよ。戦争が終わったから、お祭りができるようになりました。

豊岡（入間市）に士官学校があったのでそこが米軍基地になり、そこから来た米兵も星祭り（七夕まつり）をとっても珍しそうに見ていました。

―一番よく行った場所はどこですか？

稲荷山公園ですね。お稲荷さんがあるからお正月は毎年お参りに行っていました。

あとは…日米会話学院があった入間川小学校（学院は校内の裁縫室を使用）。お父さんが日本人でお母さんがアメリカ人のメアリー佐々木先生に英会話を教えてもらいました。英会話を学ばないとお店にアメリカの人がやって来ても接客ができなくて、何を言っているか分からないのは死活問題だったんです。ABCから始める初級クラスから上級クラスまであって、各家庭から一人ずつ通っていたと思います。

―「星祭り町」の中で、戦後すぐ米軍が町に入ってきて、これからどうなっていくのか戦々恐々としているときに、主人公が外の様子を見に行く記述があります。実際に津村さんは外を見に出られたと思いますが、どのような気持ちでしたか？また、その時に小説を書こうと思っていましたか？

ただひたすら好奇心で見ちゃったのよ。戦争が終わって死んだような町になっていたから、どうしても町の様子が見たかったの。

小説を書こうと思ったのは学習院女子短期大学に入学して、文芸部を作ってからです。すぐに雑誌を出したいと思ったわ。その頃夫となる吉村昭と出会ったの。

―「星祭りの町」で、勉強の機会を失うなど、戦争の影響を受けた3姉妹の経験の差を書かれていますね。

3人姉妹の真ん中で昭和3年生まれの私が一番割りを食ってしまったと思っています。女学校の2年生までは ちゃんと授業があったけど、3年になると授業は救急看護訓練に…、それからは全然勉強ができなかった。戦争が終わってドレスメーカー女学院に通ったのは、洋裁店「ボン」をやって、食べていかなくちゃいけないから。でも、勉強がしたくて学校へ行きたかったの。

だから、洋裁店「ボン」を1年でやめて猛勉強して、高校卒業認定試験という筆記と面接を学習院で受けました。面接で、「私は、とにかくブランクがあるってことは、それだけ勉強していないってことですから、どうしても勉強したいんです」って言ったのね。あとは時事問題に答えたら、「あなたの認定試験はこれで終わりました」と言われて、高校卒業の認定をもらって短期大学の試験を受けました。

―コロナ禍となり、今までできたことができなくなるなど、夢見ていた経験をできていない世代もいます。そうした人たちにメッセージをお願いします。

私は洋裁店「ボン」が繁盛しているのに、短期大学オープンの新聞広告を見たら、どうしても学びたくなりました。自分の学力が女学校2年まで（中学校程度）しかないって思ったら、どうしても学校で勉強したいって思いが強くなってしまってね。もちろん、戦争でやりたくてもできなかったことはあるのだけど、「学びたい」とか「創作したい」という気持ちは持ち続けていました。どんな時でも「やろうという気持ち」と、それを「行動に起こす」ことが大切だと思うわ。

【参考文献】
津村節子展 生きること、書くこと（荒川区）
津村節子自選作品集（岩波書店）
星祭りの町（新潮社）

次のページで「星祭りの町」をご案内します。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
SDGsの関連アイコンを特集ページに標記しています

疎開先の入間川の土手にて 昭和21年
（写真提供：津村節子さん）

【経歴】
福井市生まれ。母は9歳の時に死亡。13歳、東京府立第五高等女学校に入学。16歳、父は福井にて急死。戦争が激しくなり母の実家を頼って入間川町に疎開。
学習院女子短期大学に進み、大学の文芸部で吉村昭氏と出会い結婚する。その後、夫婦で作家活動を続ける。37歳、「玩具」で第53回芥川賞受賞。女性の芥川賞受賞者としては6人目。75歳、恩賜賞・日本芸術院賞受賞。83歳、川端康成文学賞、菊池寛賞受賞。88歳、文化功労者として顕彰される。90歳、紺綬褒章を受章。

七夕の夜、孟宗竹に色とりどりの七夕飾りをとりつけ、中心に、ウエディングドレスの人形を吊り下げた。短冊には、それぞれの願いごとを書いて枝に結びつけ、人形と共に空に向かって高々と立てられた。

それだけでも、洋装店とわかるだろうと思ったが、スーベニアショップで、米兵たちのジャンパーや、ハッピーコートの背に絵を描かせているペンキ屋へ行き、中央のガラス二枚に横文字でDRESS MAKERと書くように依頼した。ガラス戸は素通しなので、文字の周囲をグリーンと白とピンクで、花唐草を描き、内部が丸見えにならぬよう註文した。ついでに三角柱の看板に、グレース洋裁研究所、と花文字で書いてもらった。

グレース洋裁研究所

「ええ、入間川の七夕祭りは有名なんですよ。東京や近郷近在から大勢の見物人が来て、西武線も臨時電車を出すほどです。ニュースでもやりますし……。去年とおとしの二年間は戦争で出来ませんでしたが、今年復活するので、いま準備で大童です」

西武線の入間川駅から、八幡神社のある小高い丘の下の道をだらだら下ってぶつかった道が入間川町のメインストリートで、入間川に沿ってひらけた細長い町を貫いている。

入間川駅
（現：狭山市駅）

八幡神社

八幡神社に「星祭りの町」の記念碑があります
（令和3年4月建立）

入間川町のメインストリート

入間川

「ええ、母の実家があるので、小さい時からよく来ていましたから、第二のふるさとみたいなもので。八幡さまで蝉をとったり、入間川で泳いだり、目高をすくったり」

八百屋

私たちが借りている家は、大通りに面している肥料問屋の老夫婦のために建てられた隠居所で、肥料問屋と八百屋の間をはいった横町にある。

肥料問屋

スーベニアショップ

イルマガワスーベニアショップ開店の日、日曜日のせいもあってか朝から店の前に何台ものジープが停った。私はいつものように横町から顔だけ出して、店の様子を窺っていた。

八幡神社の鳥居はここに

進藤呉服店

私は、町の様子がどうなっているのか知りたくてならなくなった。手洗いに行くふりを装って、こっそりと裏口から家を抜け出し、横町から出ぬように頭だけ突き出して大通りの左右を見渡した。

伯母が養子を迎えて後を継いだ進藤呉服店は、肥料問屋のななめ前にある。

製茶と養蚕が盛んだった町、その昔は、鎌倉時代から室町中期にかけて、鎌倉街道の交通の要衝として栄えていた古い町、入間川の川沿いに発展した細長いのどかな田舎町は、ローマ字の看板と、カーキ色の服にハロー帽をかぶった青い眼の兵隊達と、濃い口紅の女達に侵蝕されはじめ、様相を変えていった。

「星祭りの町」MAP

物語中の文章を現在の地図（入間川3丁目付近）に重ねて、物語に登場するまちを再現しました。

イラスト：池原昭治氏
文：「星祭りの町」新潮社より引用

問合せ　広報課へ内線7161